

環流



第187号 令和5年12月21日

<目次>

生徒の活動：向陽中学校……………P1
 巻頭言：小竹 雅浩 校長……………P1
 教育実践紹介：山の手小学校……………P2
 第13次研究2年次目のすすめ……………P3
 教育研究所情報：北海道教育研究所連盟
 研究協議会（十勝大会）より……………P4



←生徒総会 今年度より議案審議は chromebook 総会はプロジェクターによるペーパーレス化



↑ 1年生英語科
 グループ発表「there is ～を使って紹介」
 chromebook を使ってグループで作成



↑ 体育科 バレーボール
 ゲーム後のジャムボードを活用したチーム
 ミーティング（昨年の公開研究会より）

道具をうまく使って

小樽市立向陽中学校 校長 小竹 雅浩



本校では、スコラノート（生徒向けスケジュール帳）を採用し、朝の活動の時間に記入することで生徒自身が日々の生活を振り返る機会としている。また、毎週水曜日が家庭学習の提出日となっており、目標としている取組ができているか学年団でチェックしコメントを添えて返却している。スマートフォン等インターネット機器の長時間利用や家庭学習時間の不足などが課題とされてきた中での、本校でのこれまでの継続した取組である。取組の状況を見るとまだまだ改善の必要があるものの、学年を追うに従って意識は高まっていく傾向にある。教育相談等の資料としても活用しながら、子どもたちの学習への意欲を高めていきたい。

校内研修では、今年度 ICT 機器活用に関わるミニ研修を行い、グーグルのジャムボードを活用した道徳の実践の交流やグーグルマップを使った新たなプレゼンテーションを学び、活用が広がってきている。また、小樽市教育委員会の主査をお招きして、「対話的な学び」に関わる講話を頂いた。タブレットの日常的な活用や授業での生徒同士の課題解決に向けた対話の場面・時間の設定はまだ十分ではないものの着実に進められてきていると感じている。

これからも生徒指導の視点も大切にしながら、これらの道具を上手に使いながら、子どもたちに必要な資質能力の育成に努めていきたい。

＜研究推進校の実践紹介：小樽市立山の手小学校＞

主体的に学びをつなぐ子どもの育成

～主体的・対話的で深い学びの実現に向けて～

1 はじめに

開校当初から国語科の学習を窓口とし、学習の土台づくりを行い、毎日の音読や語彙を広げる活動、作文を書く活動に取り組んできた。また、学習の基礎となる知識・技能を身に付けさせ、「書くことを厭わない子ども」を育成すると共に、主体的・対話的で深い学びの定義を全職員で確認しながら研究の推進を行った。

現在の研究では、児童が自ら学習内容や学習方法を選択していけるようになるための、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を目指している。



2 研究の推進について

研究主題を「主体的に学びをつなぐ子どもの育成」とし、3カ年の計画を立てて取り組んできた。

研究内容を2つ設定し、研究内容1では「自己成長を促すための個別最適な学びの実現」に向けて、主体的な学び、個別最適な学びを児童が自ら進めていけるように、学習用語の獲得を目指した。また、学習用語を起点として、自ら問いを持ち、自ら学習課題を見つけて行けるように、発達段階に応じた指導をブロックで検討している。

研究内容2は、「対話をつなぎ、学びを深化させる授業づくり」とし、思考と表現を伴った判断力を高める対話場면을授業に位置付けている。学習指導要領に示される、「構造と内容の把握」「精査・解釈」「考えの形成」「共有」の学習過程を意識して単元の構想を計画することで、判断力を高める対話場面の設定を意図的に行うようにしている。加えて、考えを深めるきっかけとなるような指導者からの問い返しを行い、発達段階を踏まえたリフレクションを日々の授業や単元に位置付けることで、学びを深められるように授業を構成している。

3 研究実践について

研究内容を児童の実態や発達段階に合わせてブロックごとに検討し、交流授業として全学級で授業実践を行った。また、これまでの研究の成果と課題を確認するために公開研究会及び検証授業を行っている。



公開研究会では、1年生と6年生で「読むこと」領域の授業を公開し、多くの助言をいただくことができた。1年生では『じどう車くらべ』の教材で、既習の「問い」や「答え」という学習用語を繰り返し使い、児童がどの説明文でも、それらを生かして読むことができるように意識付けを継続してきた。さらに、思考と表現を伴った判断力を高めるために、対話を通して互いの考えの共通点と相違点を見つけ、自分の考えを深められるように授業を展開した。6年生では『海の命』という教材で、主体的な学習の実践として、学習の個性化を図り、ジグソー法で学習を進めた。自ら追究したい問いを見つけ、解決する手立てを選択し、考えを共有し合うことで、題名の解釈を深めることができた。どちらの学年でも一人一台端末を互いの考えを把握する手段として効果的に活用することができた。



講演会では、講師に筑波大学附属小学校の青山由紀教諭をお招きし、『「深い学び」を生む国語授業の問い』についての講話をお願いした。児童の学習意欲を高める授業づくりについてのヒントをたくさんいただくことができた。

4 終わりに

3カ年の取組を通して、指導者が課題を与え続けるのではなく、児童が自ら課題を見つけ、解決していけるように、発達段階に合わせた学習内容の検討を行ってきた。今後も学習者が主体となった授業の在り方を検討し、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を目指していく。

第13次研究2年次目の研究をすすめています

小樽市教育研究所では、月に1回研究員による会議を開き、第13次研究2年次目の研究を進めています。また、所内検証授業を2回実施し、公開検証授業につなげています。今回は所内検証授業の研究内容1【「個別最適な学び」の工夫】について紹介させていただきます。教科を担当する方でないと内容を把握するのが難しいと思いますが、詳細は年度末の紀要に掲載しますのでよろしくお願ひします。

<佐藤冨研究員（西陵中）の検証授業：1年生国語（筋道を立てて（思考のレッスン2 原因と結果））>

○研究内容1【「個別最適な学び」の工夫】

①視点1：子供の学習進度や学習到達度に応じた指導方法の工夫

○学習過程の工夫

授業の前半では教室全体で3つの問題を使って「つながりがおかしい文章」の理由を考え、後半で練習問題を3つ用意し、自分の取り組みやすいものを選ぶ場面を設定する。前半で考えた問題と照らし合わせながら答を予想し、取り組む問題を自己決定することで、子どもが自分の理解度に応じた学習課題を選択できるようにした。

また、練習問題に取り組む場面で Jamboard を活用することによって、同じ課題を選んだ生徒がたがいに書いていることを参考にしあうことのできる環境をつくる。それにより、考えを書くことを苦手とする生徒が活動に取り組むようにしたい。

②視点2：子供一人一人が自らの学びを発展させたり、探究したりする学習を位置付けた指導計画の工夫

○ゴールの見通しの工夫

「筋道を立てる」というテーマに沿って大きな単元を進めていく。単元の後半に「書く」「話し合う」というアウトプットの学習活動を設定することによって、単元の前半の学習の意味付けをはっきりとさせたい。

教師と生徒が「よりよく書くため、よりよく話し合うために知識・技能を獲得する」という共通認識のもとで、各教材の学習活動が進められるように単元計画表やルーブリックを活用していく。



<平山立治研究員（潮見台小）の検証授業：3年生算数（かけ算の筆算）>

○研究内容1【「個別最適な学び」の工夫】

①視点1：子供の学習進度や学習到達度に応じた指導方法の工夫

○解決の見通しをもたせ、解決方法を選択する

一単位時間を通して、学級の全児童が授業前より授業後に自らの積み上げを実感することが望ましい。そのためには自力解決に向かう姿が必要不可欠となるのだが、既習事項を関連付けた考え方に気付いたり、解決への見通しをもったりする力には個人差がある。そこで単元を通して、解決方法の見通しを交流を通して確認したり、関連する既習事項について確認したりする場を必要に応じて設定する。そうすることで、より多くの児童が自力解決に向かえたと考えたからである。さらに、児童自身にその解決方法の中から選択させることで、解決の道筋を見出して学びに向かう姿を引き出していきたく考える。

②視点2：子供一人一人が自らの学びを発展させたり、探究したりする学習を位置付けた指導計画の工夫

○「なるほど!」「だったら…!？」の視点を明確にした単位時間の振り返り

「振り返り」とは、簡潔に言うと立ち止まって、今まで歩んできた道を見直すことである。その時間の学んだ軌跡全体を見ることで、学びを統合することや、大切なことを抽出することが目的であり、今後の学習や生活場面に広げていこうとする姿勢を育てていくために必要となってくると考える。

そこで本学級では、児童自身がこの「振り返り」を自ら思考の流れに組み込んでいけるよう、「なるほど!」→**学習のポイント**・「だったら…!？」→**発展的な考え**という視点を明確にもてるよう振り返りの場を設定してきた。単位時間で振り返った「なるほど!」が次時以降の問題解決の方法につながり、「だったら…!？」と考えたことから新たな問いを見いだす。そのような振り返りができるような授業展開を心がけていくことで、主体的に学習に取り組む姿を引き出していきたく。



教育研究所情報

令和5年度第78回北海道教育研究所連盟研究発表大会（十勝大会） 兼第65回全国教育研究所連盟北海道地区研究発表大会より

標記の研究発表大会（8月31～9月1日）について、本研究所より佐藤冨研究員（西陵中）がZOOMにより参加しましたので、概要の一部について紹介します。

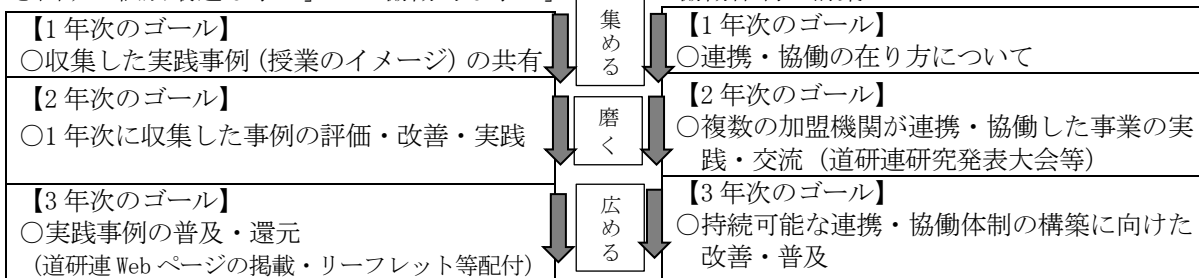
1【全体発表】第17次共同研究の成果と課題・第18次共同研究の概要

発表者：令和5年度共同研究推進委員会委員長（十勝教育研究所員）山本 由佳 氏

- (1) 第17次共同研究（研究主題：学びに向かう力の育成に向けた指導と評価の在り方）
 - ・指導案バンクの作成・運営（道研連のWebページに掲載）
- (2) 第18次共同研究（研究主題：全ての子どもたちの可能性を引き出す「個別最適な学び」と「協働的な学び」）

<研究内容1>全ての子どもたちの可能性を引き出す「個別最適な学び」と「協働的な学び」

<研究内容2>子どもの成長を支える連携・協働体制の構築



2【提言発表（分科会I）】個別最適な学びと協働的な学びの実現に向けた授業づくり

提言者：胆振教育研究所 所員 黒川 知恵 氏

- (1) 指導の個別化
 - ・ICT機器を活用して自分に合った方法で課題解決を行う。
 - ・自分のペースや課題に合った問題を解く。
- (2) 学習の個性化
 - ・児童生徒自ら学習課題を設定する。 ・ICT機器を活用して児童生徒自らが調べる。
 - ・プレゼンテーションソフト等を活用して児童生徒自らがまとめる。
- (3) 協働的な学びの改善
 - ・自分の考えをペアやグループで説明する。
 - ・他者の意見から、新しい考えを見つける。

3【まとめ】「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実に向けて

助言者：文部科学省 国立教育政策研究所初等中等教育研究部 白水 始 氏

- (1) 個別最適な学びについて
 - 指導の個別化
 - ・「レベルに応じてどう教えるか」という指導よりも「この問題にこの子は何を考えているのか」と見取ることが大事かも
 - 学習の個性化
 - ・その子の経験則を大切にしながら、それが教科書とどう違うのか、大人や昔の人はどう考えて教科書に書いてあるような結論に至ったのかを理解していけるとよさそう
 - ・もしかすると「個別最適な学び」でスキルや学力をそろえて→「協働的な学び」と考えるより、「協働的な学び」→新しい疑問ややりたいことを生み出して「個別最適な学び」につながると考えたほうがよいかも
 - ・先生の学びと児童生徒の学びは相似形。ならば、先生方も自身の学び方を見つめてみては…
- (2) 「協働的な学び」でやりたいことは、一人一人がもっている「素朴理論」を比べたり組み合わせたりして「学校で教わる知識」を一人一人が自分なりの答えとして納得しながら獲得する過程。
 - ①一人では十分な答えが出ない課題をみんなで解こうとしている
 - ②課題に対して一人一人が何か言いたいことをもっている
 - ③「私の考え」と「あなたの考え」には「違いがある」ということをみんなで理解・許容している
 - ④「違う考え」を組み合わせると、よりよい解に到達できるという期待がある
 - ⑤答えは自分でつくる、また必要に応じていつでもつくり変えられる、のが当然だと思える